

ウクライナの都市リヴィウの造船エンジンニア、根室の旅館に泊まるカニ買付業者、ロンドンのパブで日本製自動車専用船を求めらるバンングラデシユ人。最初の登場人物を結び付ける環は神戸公安調査事務所であつた。

公安調査官は、検察官や警察官よりも地味で、麻薬取締官と比べても知名度が低い。とても情報機関員には見えない主人公の壮太は国際テロ班に属する。大学の真面目な助教にも少ないほど目立たぬ男だ。しかし、松江の古美術商の家に生まれ、茶道や書画の古典教養を身につけた公安調査官などは、そういうものでない。

壮太は六甲山麓をジヨギング



(小学館・1870円)

## 地味目な公安調査官、巣立つ

しながら中国人が買収した山荘が気になり、そこから中国が神戸有数の船舶代理業を買収したことを知る。中古の自動車専用船は必ず、解体のため、解体屋に売らねばならないが、書類は何とでもできる。結局は、中国あたりに引き取られるのだ。

この船舶代理業のウクライナ人パートナーとは、中国に買収された造船エンジンニアのことだ。ウクライナの中古航空母艦を「遼寧」として蘇スウラせた男は、娘の難治医療のために中国からもっと金が欲しい。話は、カニ買付業者と神戸の公安調査官(壮太の上司)やバンングラデシユでの解撤の謎と結びつく。

本の随所に神戸の庶民食が出てくるのも楽しい。眞露マキロ1ルッポトルにユツケ、生センマイ、塩タン、ハラミ、たれロース、レバー骨付カルビ。「飼葉喰いがええな」と言う言葉は、食が良よいということらしい。

壮太らは中国の動きを追う

著者 しま・りゅういち  
略歴 作家・外交ジャーナリスト。1949年生まれ。著書「スギハラ・サバイバル」など。

ちにやがて米国の影を嗅ぎつける。どうも米国は同盟国日本の膝元・神戸で宿敵中国との密会を重ねているらしい。フザケルナと思うのは、壮太だけではな。ここで米中の動きを警戒する某大国の諜報機関員が壮太に接近する。

日本の文化と言葉への驚くべき造詣の持主である。手嶋作品の愛読者なら憶えのある人物かもしれない。この国とはどこか。壮太も諜報界の仮面劇のなかで予想もしない職務に変わる。森に逼塞ヒツソクしていた一羽のカッコウはまさに蒼穹ソウキウに向けて飛翔しようとしている。国際級のインテリジェンス小説の最新作である。

評 山内昌之

(武蔵野大特任教授)